



色水をつくりたい

園長 佐藤 淳穂

5月が目前のまぶしい日差しの中、年長組の子供たちが花びらで色水を作っていました。パンジーやデイジーの花がプランターからこぼれ落ちそうなくらいに咲いていて、咲き終わった花は摘んでよいことにしているのです。透明カップの中に色とりどりの花を浮かべただけでも涼し気です。

少量の水の中で花びらを指でこすったり、小さなすり鉢で花びらをつぶしたりしていると、じわーっと色かにじみ出てきます。「見てー。」そのたびに声が出て、感動している様子がわかります。こっちの花も試してみよう、葉っぱでもできるかな、と好奇心がくすぐられます。自然のものから色をつくる作業は、人が古代から追求している文化です。子どもの遊びは、人がつくり出してきた文化をなぞるような営みであることが興味深いです。

色水を小さなボトルに入れてふたを閉めると、光に透かして見つめています。一緒に見てみると、ボトルの中で花びらの繊維が天女の羽衣のように揺れて、何とも美しく感じました。子どもたちは互いにボトルの中の色水を見比べていますが、一つとして同じ色はありません。勢いよくボトルを振って泡をつくり、二層になっている抹茶ラテのようにしている子もいました。(本人はビールと言っていました。)

そのうちに、担任の声掛けで、テラスから園庭に場所を移動することになりました。担任はテーブルにしていたベンチを広いスペースに運び、椅子代わりにするビールケースを2個置きました。子どもたちはビールケースに腰掛け、教師と一緒にジュースを飲む真似をしたり、さらに色水づくりをしたりしていました。自分の椅子も欲しくなった子どもは、自分でビールケースを選び込みました。あらためてじっくりと色水の遊びに取り組む環境が整っていったのです。

楽しそうな場に気付いて数人の子どもも加わりました。新メンバーはどうやって色水をついているのか眺め、道具をそろえたり、プランターをのぞき込んだりしています。花びらや道具を揃えたものの自分の座る椅子がないことに気付いた Aさんは、急いで庭の隅にビールケースを取りに行きました。しかし、持ってきたケースは皆が座っているものよりもずいぶん大きいサイズだったのです。Aさんは座ってみると、テーブルよりも自分のひざが高く出ていることに気付きました。もぞもぞと座り直した後、立ち上がってケースを両手で持ち、小走りで取り替えに行きました。次に持ってきたケースは一回り小さいものでしたが、まだテーブルには高さが合いませんでした。

子どもは、楽しいことの実現のためにはどんな苦勞も惜しみません。道具を調達したり、何回も試したりしながらいろいろなことを学んでいます。簡単に手に入ったり、すぐに完成したりするよりも、時間をかけて夢中になれる遊びの中に、子どもたちの育ちがあることをあらためて感じる場面でした。

